アメリカ映画『Formosa Betrayed』と台湾の民主化

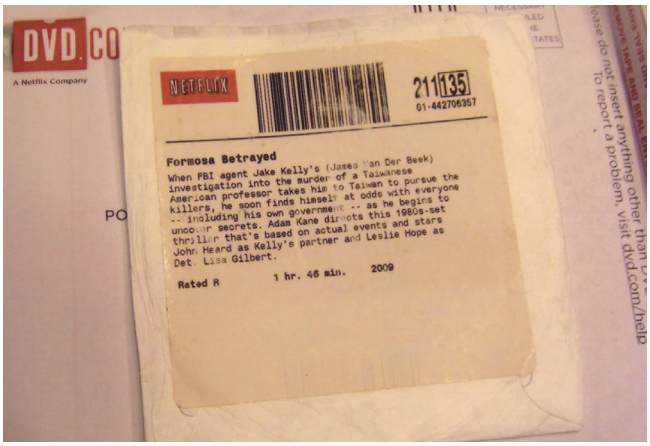
ジャーナリスト　戸張東夫

いつだったか、それほど前のことではなかったと思うが、『裏切られた台湾』というアメリカ映画のあることを耳にした。おそらくその時は何か別のことで頭の中がいっぱいで、この映画について調べたり考えたりする余裕がなかったのであろう。『裏切られた台湾』はそのままになってしまった。しかし気にはなっており観られるものなら観てみたいとひそかに思っていたのである。ずいぶん意味深長なタイトルだったが、何となくアメリカ映画らしからぬ題名だとか、タイトルに台湾とあるからにはやはり台湾に関する作品であるに違いないなどと想像していた。だがわが国で公開された形跡はなく、これでは DVD にもなっていないだろう。当面観ることはかなうまいと自分に言い聞かせ、なかば諦めた形になっていた。

ネットフリックスで発見した『Formosa Betrayed』

だが昨年末から今年（2017 年）初めにかけて米カリフォルニア州サンディエゴの娘夫婦のところに滞在していたときに『裏切られた台湾』をまたふと思い出した。地元アメリカなら多少古い作品でも、劇場で観ることは出来ないにしても DVD なら手に入るのではあるまいか。そう考えたのである。ありがたいことに娘夫婦はネットフリックス（NETFLIX）のメンバーだった。NETFLIX はオンライン DVD レンタルと映像ストリーミング配信事業会社でアメリカの最大手。日本にも進出しているから利用している読者もおられるかもしれない。まず NETFLIX の DVD リストをチェックするのが早道だろうと考えたのだが、気が付いてみると『裏切られた台湾』の原題、英語のタイトルが分からない。仕方がないのでタイトルに Taiwan（台湾）という語が含まれている作品を探したがリストには一本もなかった。

ところがその過程で『Formosa Betrayed』という作品が目に付いた。「Formosa」とは台湾の古い呼称で、欧米では今でも使われている。この作品



NETFLIX 独特の角封筒で送られてきた『Formosa Betrayed』の DVD。

シカゴの殺人事件を調べる FBI のジェイク・ケリー捜査官（ジェームス・ヴァン・デル・ビーク）（右）。
（NETFLIX・DVD 画面より。）

を素直に翻訳すると『裏切られた台湾』になる。そこで作品の解説を読んでみた。それによると製作されたのは2009年。監督はアダム・ケイン（Adam Kane)、出演者はジェームス・ヴァン・デル・ビーク（James Van Der Beek)、ウェンディ・クルーソン（Wendy Crewson)、ジョン・ハワード（John Heard)、ウィル・ティアオ（Will Tiao）ら。アメリカの映画人について筆者は詳しくないので、この中には知っている顔は一つもない。製作会社はFormosa Films及びLiving Filmsとある。この映画を製作する目的で作った会社かもしれない。ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメントやパラマウント映画などのメジャーでないことはたしかだ。

内容は米国内で台湾系アメリカ人教授を殺害した犯人を追って米連邦捜査局（FBI）の捜査官が台湾に赴き真相を探るというもの。筆者の想像していたストーリーに近いが、これが果たして探し求めている『裏切られた台湾』なのかどうか断言することはできない。だがたとえこれが別の作品だとしても、こちらはこちらで面白そうではないか。というわけで『Formosa Betrayed』を指定したところ、翌日さっそくNETFLIX独特のDVDのサイズの白い厚紙の角封筒に入れて配達してくれた。これがオンラインDVDレンタルなのかとそのスピードに舌を巻いた。こうしてほとんど苦労しないで『Formosa Betrayed』にたどり着いたのだから便利な世の中になったものである。

さっそく作品を鑑賞させてもらった。1時間46分、なかなかしっかりした作品で、予想以上に面白かった。ポリス・ストーリーとしても楽しめるし、台湾現代史や台湾の政治に関心のあるファンにはそれなりの視点から見ることもできる。わが国のファンに是非とも観てもらいたい映画である。作品のあらすじを多少詳しく紹介するとともに筆者なりの解説や論評を加えておこう。

台湾の国際空港。容疑者の一人が“消される”現場にもなった。（NETFLIX・DVD画面より。）

米国内の殺人事件が台湾に飛び火

ドラマの舞台は1983年のアメリカと台湾。米中西部イリノイ州最大の都市シカゴでひとりの男が殺害された。地元の警察の調査によると殺されたのは市内の大学に勤務する台湾系アメリカ人男性教授で、台湾政府に公然と反対していたという。FBIが捜査した結果、台湾人の男二人組みの犯行と判明したが、二人はすでに国外に脱出し、台湾に帰った後だった。

外国人が米国内で犯した殺人事件は米国の主権にかかわる。FBIは新人で正義感の強いジェイク・ケリー捜査官を台湾に派遣する。その際FBIは「米台間には正式な外交関係がない。捜査活動は台湾当局にまかせ、観察と協力の姿勢で通せ」と厳しい指示を与えた。だが犯人逮捕と真相究明を自分の任務と考えていたケリーは、台湾で“越権行為”である捜査活動を断行し、台湾当局だけでなく、FBI当局とも摩擦を起こすことになってしまう。

ケリーが台湾にやってくると、FBIの捜査介入に対する台湾当局の反感が極めて強いことが分かった。犯人に関する情報はおろか捜査の進捗状況も一切教えてもらえなかった。ケリーはいわば蚊帳の外に締め出された格好だった。台湾の捜査

当局は時にはケリーの捜査を妨害するとしか考えられない行動を執ったりした。

たとえば独自のソースからの情報でケリーが事件の容疑者のひとりが潜伏している先を突き止めたので逮捕に向かったところ、台湾の捜査隊が一足先に来ており、容疑者を殺してしまった後だった。まるでFBIには何も知らせないといわんばかりだった。

台湾南部の工業都市高雄で反政府デモ。（NETFLIX・DVD画面より。）

台湾独立も民主化も反政府

ケリー捜査官は台湾当局に悟られないよう独自に捜査を進めた。するとこれまで気が付かなかった意外な政治的背景が浮かび上がってきた。

中国大陸における共産党軍との内戦に敗れ1949年台湾に逃れた国民党政権は戦後中国から国民党軍とともに台湾にやってきた人たち（外省人と呼ばれる）を中心に構成されており、台湾の中国化や中国と台湾の統一を望んでいた。これに対して戦前からの台湾住民（本省人と呼ばれる）は台湾を中国から切り離し、できれば台湾の独立を実現したいと密かに考えていた。台湾住民と政府の間には当初から台湾の前途にかかわるこのような深刻な対立の火種がくすぶっていた。そのうえ台湾当局の一党独裁による住民の強権支配が三十年以上も続いていたのだから台湾住民がいつまでも黙っているわけがない。台湾独立だけでなく民主化や政治改革を要求する反政府勢力がしだいに支持を広げていた。台湾政府はこれらの勢力を敵視し逮捕したり、暴力に訴えたり、時には暗殺するといった陰湿な手段で徹底的に鎮圧しようと動いているというのである。そういえばシカゴで殺害された教授も反政府の立場だった。

台湾政府のこうしたやり方はケリー自身の経験からも立証できそうだった。台湾南部の工業都市高雄で平和的な反政府デモに警官隊が襲いかかり、警棒を振るってデモ参加者を手当たりしだいに殴りつけ、見ていたケリーまでひどく殴られてしまった。だがこれなどまだいいほうだった。ケリーは二人の民主化運動活動家に捜査協力してもらっていたのだが、協力者の一人は何者かに殺害され、残るひとりは妻とひとり娘を殺されるという悲劇に見舞われる。FBIの捜査に協力したことが災いしたのである。

ところが高雄で反政府分子と接触したとしてケリー自身も台湾当局から帰国を命じられてしまった。

事件の背後に台湾政府の影

ケリーには事件に台湾政府が介入していることが次第に明らかになってきた。また政府高官も、帰国が決まったケリーにシカゴの事件に台湾政府が介入していると認めた。だがひとり残った容疑者の証言がケリーには必要だった。するとその政府高官はなぜかその容疑者の隠れ家を教えてくれたのである。隠れ家に行くとたしかに容疑者に会うことができた。容疑者は「安全にアメリカに連行してくれれば全てを話す」とケリーに持ちかけた。要求に応じたケリーが容疑者とともに空港に到着したところ、容疑者は何者かに狙撃され死ん

でしまう。口封じのために殺されたのだろう。ケリー捜査官は、容疑者をおびき出すために利用されたに違いない。こうして事件は闇から闇に葬られてしまったのである。

帰国したケリー捜査官は「アメリカ国内で台湾系アメリカ人が殺害されたにもかかわらず、台湾でFBIは捜査することもできず、殺害される危険のある協力者の反政府活動分子を助けることもできない。アメリカの正義にももとる。」という意味の抗議をして辞職してしまう。

「台湾政府が黒幕だ」と力説するケリー捜査官。(NETFLIX・DVD画面より。)

強烈な政治的メッセージ

わが国で未公開の作品ということもあって作品内容の紹介がかなり長くなってしまったが、これがこの作品のあらすじである。だがあらすじだけでは伝えることのできない以下の二つの重要なメッセージがこの作品に盛り込まれている。

(1) 台湾の本省人は戦後中国大陸からやって来た外省人の国民党独裁政権によって長い間苦しめられた。(ドラマには直接関係のない2.28事件にも触れている。)

(2) アメリカの台湾に対する政策は消極的で中途半端である。(ケリー捜査官の辞職の時の抗議の内容だけでなく、ラストに現れる「目下台湾を独立国家として承認している国は23カ国である。アメリカはこの中に含まれていない。」というコメントにも留意されたい。)というものである。

これら二つのメッセージが棒のようにこの作品を貫いているのである。きわめて政治色の強い作品というべきであろう。

＊　2・28事件は、1947年2月27日夜台北の露天でヤミたばこを売っていた老婦人が取締りの専売局員と警官に殴打されたのをきっかけに、外省人に対する本省人の不満が爆発した暴動。騒ぎは台湾全土に燃え広がり、六千人を越す死傷者を出したといわれる。この事件によって台湾の本省人と外省人の対立が決定的になってしまった。

＊＊　2016年12月アフリカのサントメ・プリンシペと断交したことから台湾と外交関係のある国は目下21か国となった。

これら二つのメッセージをこの作品のタイトル『Formosa Betrayed（裏切られた台湾）』に即して言い換えれば、台湾は国民党政権に裏切られ、さらにアメリカにも裏切られたということになるのであろうか。このBetrayed（裏切られた）という言葉のニュアンスが筆者にはあまりしっくりこないのだが。

ドラマの表面に現れない特徴をもう一つ指摘しておきたい。この作品を通じて台湾現代史や台湾の政治、社会についての理解を深めてもらおうという製作者の強い意図が感じられることである。製作者のこうした姿勢や熱意が、基本的にはエンターテインメントであるこの作品にある種のひたむきさを感じさせている。

蒋経国の台湾化政策が追い風に

ところでこの作品は本省人の視点から、本省人

に焦点を絞り、外省人政権の支配下における本省人の苦悩をテーマにしていることもあって、映画の中では本省人を中心とする民主化勢力がテロ攻勢によって息の根を止められてしまったかの印象を受ける。だが現実には台湾の民主化勢力は台湾の民主化と政治改革を短期間にしかも平和的に成功させたことで国際的にも注目されている。この作品の背景である1980年代初めの台湾の民主化と政治改革のかつてない盛り上がりを語らなければ公平を欠くというものであろう。

八十年代台湾の民主化運動や政治改革を語るには、1972年のニクソンショックに触れないわけにはいかない。ニクソン訪中による米中接近で資本主義陣営と社会主義陣営が地球的規模で対立していた冷戦構造があっという間に崩壊してしまった。冷戦構造が続いたおかげで台湾は社会主義中国に対する防波堤としてアメリカの強力な支持を期待することができたのだった。冷戦構造がなくなってしまったいまアメリカはこれまで通り台湾を支持してくれるだろうか。それが台湾政府にとって最大の問題であった。一党独裁による強権支配で住民を押さえつけていただけに、アメリカの支持が失われたら住民の反政府感情が爆発し、台湾政府の存続すら難しくなってしまう。台湾政府は住民と和解し、住民との距離を縮めておかなくてはならない。そこで当時の蔣経国行政院長（首相）は本省人の登用や政治参加、限定的自由化を断行した。蔣経国の台湾化政策である。

これはいわば上からの改革だが、これが追い風になって民主化や政治改革を要求する反政府勢力の急速な台頭を招いた。一部の反政府グループは『台湾政論』、『八十年代』、『美麗島』などの“政論雑誌”を刊行して言論活動を強化した。掲載された記事や論評が当局の逆鱗に触れて発行停止処分や没収されたりする事件が起こると、そのたびに別のタイトルの雑誌を創刊するというゲリラ戦術で対抗した。選挙を通じて政界にも進出してきた。

盛り上がる民主化、政治改革運動

七十年代末から八十年代初めにかけての時期の反政府運動の盛り上がりを端的にしめすのが77年の中壢事件と79年の美麗島事件である。この二つの事件は台湾の民主化闘争の歴史的モニュメントとしていまなお多くの人たちに語り継がれている。

中壢事件は77年11月の桃園県長選挙をめぐって発生した民衆暴動。国民党を除名された青年候補許信良と国民党候補欧憲瑜が県長のポストを争った。許信良は国民党の「一党独大」の弊害を批判し、外省人と本省人の差別撤廃など台湾の民主化を訴えた。ところが投票日当日中壢小学校の投票所で二人の老人が許信良に投票した票を同校校長で国民党員の主任監査員が汚して無効票にしてしまおうとしたのに怒った住民が警察署を包囲、襲撃する暴動になった。選挙の結果許信良候補の得票数は二十三万五千九百四十六票、これに対し欧憲瑜候補は十四万七千八百五十一票で、許信良候補が約九万票の大差で圧勝した。

一方美麗島事件は、国際人権デーの1979年12月10日夕方から翌11日午前零時半ごろにかけて台湾南部の工業都市高雄で、政論誌『美麗島』関係者を中心に約二万人の民衆が参加する集会、デモが行われ、警備当局と衝突、反政府勢力の大量逮捕を誘発した。高雄事件とも言われる。

『Formosa Betrayed』で、FBIのケリー捜査官が高雄で台湾独立を要求するデモに巻きこまれ、警官に警棒で殴打されるところがあったが、これは明らかに美麗島事件を意識したものである。

この時期になると民主化、政治改革を要求する運動は、大きな潮流となっており、政府がどんな方法で抑えようとしてももはや止め様がないという状況であった。だが、そんなときにミステリアスなテロ事件がおき、台湾社会を震撼させた。それも一回ではなかった。

美麗島事件で服役中の被告の一人林義雄省議会議員の留守宅が襲われ、林議員の母親と二人の娘が惨殺される事件（1980年）、台湾に一時帰省中の米カーネギー・メロン大学助教授の陳文成氏の台湾警備総司令部の取調べ後の変死事件（1981年）、『蔣経国伝』を出版した蔣一族に批判的な米国在住の作家江南暗殺事件（1984年）と続いたのである。江南暗殺事件は、米国側の調査もあって殺人の実行犯二人は台湾の暴力組織「竹聯幫」のメンバーで、さらに国防部情報局長ら台湾政府当局者が介入していることが明らかになった。この事件では米下院が決議を採択して、実行犯の引渡しを要求する事態になった。その他の事件はいまなお謎に包まれている。

『Formosa Betrayed』がテロ事件を再現

映画『Formosa Betrayed』は状況や人物設定などを変えてこれらのテロ事件を再現している。このようなテロ事件に当時台湾住民は国民党政権が再びかつてのような強権政策に戻るのではないかと一時緊張したが改革のペースを変えることはできなかった。

民衆側の改革要求に押される形で政府当局の改革の動きも加速した。蔣経国総統は本省人登用政策に基づき78年副総統に初めての本省人謝東閔を副総統に任命、さらに84年総統連任に伴い本省人の李登輝副総統を任命した。これは蔣総統が後継者に本省人を選んだという意味である。また反政府派は禁令を犯して86年9月本省人の党民主進歩党を発足させた。数年前であったら武力で解散させられたに違いないが、政府は「承認もしないが、取締りもしない」という態度でこれを黙認した。

そして1987年7月１５日台湾政府は国民党軍が台湾にやってきた1949年以来三十八年間もの長期にわたって実施してきた戒厳令をついに解除したのである。

「1986年下半期以降、抗議デモ、請願、自力救済など様々な形態の活動が続発するようになった。それまで無言だった台湾の街頭は、突然賑やかになり始めた―労働運動、学生運動、環境保護運動、女性運動、消費者運動、返郷（外省人の大陸への里帰り）運動などがそれである。国民党が台湾に来て以来四〇年間、一度もお目にかかれなかった様々な形態の運動が、『自由化』が始まった二年間に次々と起こったのである。」

戒厳令解除をひかえた台湾の活気に満ちた状況を誇らしげに語ったのは改革派の評論家李筱峯氏だ。

＊　李筱峯著、酒井亨編訳『台湾・クロスロード』日中出版、1993年11月、206頁。

＊＊　1980年代台湾の民主化、政治改革について詳しくは戸張東夫『台湾の改革派』亜紀書房、1989年11月参照。

最後に蛇足ながら一言。この映画が製作されたのは2009年である。台湾は1991、92両年12月それぞれ国民大会と立法院の台湾地区だけの全面改選を実現、96年総統選挙を実現し民主化（民主的移行）を完成した。2000年に民進党の陳水扁氏が総統に選出され、二期八年の間総統職にあり国民党と民主進歩党の政権交代も実現した。この時期に敢て本省人の立場から外省人を厳しく告発する作品を発表する必要はないのではないかとも思う。だが『Formosa Betrayed』はかなり政治色の強い映画である。2009年の総統は国民党の外省人馬英九氏だったから何か政治的意図があったに相違ない。

（2017年3月11日）